

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370377

研究課題名(和文)近代ロシア国家形成期における文学と空間表象

研究課題名(英文)Literature and Representation of Space in the 18th and early 19th centuries
Russia

研究代表者

鳥山 祐介(TORIYAMA, Yusuke)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：40466694

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文): 18世紀-19世紀初頭のロシアの文学作品を題材として選び、そこでロシアの空間がどのように描かれているかという問題を検討した。カラムジンの詩「ヴォルガ」を新たに分析した結果、このロシアを代表する大河のイメージの中にロシア国家と個人としての詩人自身を結びつける要素が内包されていることが明らかとなり、ロシア文化のアイデンティティの問題に新たな視点を提供することができた。また対ナポレオン戦争期の旅行記を分析し、ロシア内外の空間表象の違いを探った。

研究成果の概要(英文): This study offers new insight into modern Russian literature and Russia's cultural identity by investigating representations of spaces in Russian literature of 18th and early 19th centuries. The analysis of Karamzin's poem "Volga" shows that the image of this river in this work connects the poet's individual experiences with the image of the Empress and Russian state. The study of the travelogues in the time of Napoleonic wars reveals how the spaces in Russia and Europe was differentiated in discourses of this time.

研究分野：人文学

キーワード：ロシア 18世紀 19世紀 ヴォルガ

1. 研究開始当初の背景

(1)

ロシア文化史における 18 世紀は、近代ロシア国家の基礎が築かれた時代であり、近代以降のロシア文化を考える上で鍵となる非常に重要な時代であるが、日本のロシア文学研究がプーシキン以降に偏っていたこともあり、文学を通じたアプローチによる本格的な研究はまだ十分になされていないとは言えない。一方、ロシア(旧ソ連)本国は、この分野においてはるかに豊富な研究蓄積を誇っているが、イデオロギー的な制約や欧米など他国の研究との交流の不十分さといった問題を抱えていた時期が長かったこともあり、総じて現在あるような 18 世紀ロシア文学・文化研究は、まだ若く、より多面的な研究の余地を残す研究分野であると言える。

(2)

応募者がこれまで試みてきたのは、汎ヨーロッパ的文脈の重視や分野横断的手法など、比較文化論的な視点・方法論を取り入れることで 18-19 世紀初頭のロシア文化研究に新しい地平を切り拓くことであり、その中で特に注目してきたのが視覚文化の問題であった。日本学術振興会特別研究員として研究に携わった平成 18 年 4 月～平成 19 年 9 月、および科学研究費の交付を受けた平成 20 年 4 月から現在にかけて、「ピクチャレスク」「崇高」「風景表象などの問題に重点的に取り組むほか、18 世紀ロシアの詩文学と宮廷儀礼や戦争といった当時の政治的コンテクストとの関連性について一定の研究成果を上げ、複数の論文を発表した。一方、応募者は平成 21 年より、「ヴォルガ川」「ネヴァ川」「ウクライナ(小ロシア)」といったロシア帝国内の地理的形象が 18 世紀以降のロシア文学において担ってきた象徴性の問題にも取り組んできた。さらに、ヴォルガの文学的イメージの研究と並行して、19 世紀初頭の対ナポレオン戦争期のロシア文化の研究に取り組む中で、このロシア史上未曾有の危機の時代が、住民の疎開や軍人の遠征などロシア国民の空間移動がかつてない規模で行われ、ロシア人の地理認識に転換が生じた時代でもあることを明らかにしてきた。

(3)

以上の研究から、「風景」に対する眼差しが政治性を帯びていたこと、ロシア各地の地理的形象が特定の文学的象徴性を担っていたことなどが明らかとなったが、これらはいずれも、「ロシア」という空間がロシア文化において有していた意義という大きな問題へとつながるものである。ロシア文化における空間認識の問題には近年大きな関心が向けられており、北大スラブ研究セン

ター編『講座スラブ・ユーラシア学(3)』(講談社、2008 年)の刊行などが日本での例として挙げられるが、近代ロシア文化の基礎が築かれた重要な時代である 18 - 19 世紀初頭への目配りはまだ不十分なままであり、一方 18 世紀ロシア研究の領域でもこうしたアプローチはまだ少ない。このような経緯から、近代ロシア国家形成期の文化を、ロシアの様々な空間や地理的形象がどのように認識されたかという観点から研究することが、ロシア研究全般にとって普遍的な意義を有することを認識し、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

(1)

本研究は、18-19 世紀初頭のロシア文学・文化に表れた空間認識の考察を行う。特に、同時代の美学やロシアの政治文化など複数のコンテクストを考慮に入れ、この問題を表象論の枠組みの中で説き明かすことで、近代以降のロシア及びヨーロッパ文化に関する総合的な理解に資することを目指す。

(2)

現時点までの研究では、18-19 世紀初頭のロシア文学に現れた風景に関する言説と、当時の個々の地理的形象に関するイメージの性格が明らかとなった。本研究ではこれらの研究成果を敷衍、拡大し、18-19 世紀初頭のロシアにおける空間認識の問題を、当時数多く書かれたロシア国内の旅行記、回想録、詩などといった、文学作品を中心とする多くのテクストを参照しつつ多面的に考察する。このことを通して、最終的に近代ロシア国家形成期において「ロシア」に至る諸空間はどのように認識されたか、それはロシア文化のアイデンティティとどう結びつくのか、といった点を明らかにするのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)

本研究では、文献・資料調査をベースとした 18 - 19 世紀初頭のロシア文学の研究と、ロシア文化に表れた空間表象に関する考察という、二つのアプローチを専門的な見地から連結することにより、上記の目的の達成を目指した。その際、ヴォルガ・イメージの研究など、世界初の試みであった過去の研究の成果をも最大限に活かすよう努めた。さらに、視覚表象や旅行記、政治文化など一般に別個に研究されてきたテーマをロシア文化研究の枠内で連結した。

(2)

本研究のテーマに関する文献資料をモスクワのロシア国立図書館、歴史図書館、サンクトペテルブルクのロシア国民図書館、ヘルシンキのフィンランド国立図書館など内外の図書館で収集して分析を行った。特に帝政期の資料を多数所蔵するヘルシンキの国立図書館を積極的に利用することで資料収集の効率化を図った。

(3)

内外の研究会や学会発表の場を利用して意見交換を行った。特に、2015年8月に幕張で行われた ICCEES (国際中東欧研究協議会) 世界大会、2016年10月にサンクトペテルブルクのロシア文学研究所で行われたカラムジン生誕200周年記念国際学会では行った報告は本研究の成果の一部であるが、この報告およびその準備において国外の研究者と意見交換を行った結果、本研究の発展につながる貴重な示唆を得ることができた。

4. 研究成果

(1)

本研究の成果の一つとしては、平成27年8月に ICCEES (国際中東欧研究協議会) 世界大会にて行った報告『祖国戦争』と『国外戦争』: フョードル・グリーンカ『ロシア人将校手紙』と対ナポレオン戦争期の旅行記』がある。この報告では対ナポレオン戦争に従軍してロシアとヨーロッパの各地を旅した著者が、同時代の戦争の推移をロシア内外の空間移動と重ね合わせている点、また訪れた土地や空間に対する認識が戦争の性格付け、およびロシア文化のアイデンティティとも密接に結びついている点を明らかにした。

(2)

平成28年10月には、サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミーのロシア文学研究所にて「カラムジンにおけるヴォルガのテーマ」という報告を行った。カラムジンの詩「ヴォルガ」については以前エカテリーナ期からナポレオン戦争期のロシア詩におけるヴォルガの表象に関する研究の中で言及したが、今回の研究では、この詩が後の時代のロシアの旅行記等と言及され、ロシアの空間認識にとって大きな意義を持つ作品であることに鑑み、この詩を単独で分析対象とした。その結果、これまでの研究では専ら「ヴォルガ沿岸の多文化性の現れ」としてきたこの詩の中のヴォルガ表象が、ロシアのフォークロアの伝統や各地の川を描いたロシア文学の伝統に則りつつ、エカテリーナ二世の形象を媒介したロシア国家のイメージと詩人の個人としての経験や近しい友人との友愛に対する感情を結びつける役割を持っていることを明らかにし、ロシア文化のアイデンティティがロシア帝国の空間内の地理的形象と個々人の親密な感覚との連結点となるメカニズ

ムの一端を示した。平成29年度にはこの報告に基づくロシア語論文「『女王、母』としての川: カラムジンの詩『ヴォルガ』」を執筆し、ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所に提出した。この論文はロシア文学研究所出版より刊行予定の論集「作家カラムジン」(コチエトコワ等編)への掲載が決定している。刊行が当初の予定より遅れ、本研究の期間中には間に合わなかったが、平成30年6月に刊行が予定されている。

(3)

平成28年には、論文「18世紀ロシアの『パイドーン』? シチエルバートフ『魂の父子に関する対話』と1770-80年代のプラトン受容」が刊行された。これは他経費の援助も受けた過去の研究がもととなった論文であるが、18世紀ロシアの知識人の哲学的基盤の一端を明らかにするものである。

(4)

平成28年にされた金沢美知子編『18世紀ロシア文学の諸相: ロシアと西欧 伝統と革新』において、論文「ロモノソフと修辞学的崇高—十八世紀ロシアにおける「精神の高揚」の様式化」を発表した。ここで検討された修辞学的崇高は、18世紀以降に現れる自然の崇高を考える上での前提となる問題であり、上述のカラムジンの詩「ヴォルガ」について行われた分析にもこの視点が反映されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

鳥山祐介 Река как «царица, мать»: стихотворение Н.М. Карамзина «Волга» // Карамзин-писатель / Nikolai Karamzin écrivain: Коллективная монография / Под ред. Н. Д. Кочетковой, А. Ю. Веселовой, Р. Бодэна. — СПб.: Издательство «Пушкинский Дом», 2018, С. 131-145. (в печати)

(「『女王、母』としての川: カラムジンの詩『ヴォルガ』」) 2018年6月刊行予定)

鳥山祐介 「18世紀ロシアの『パイドーン』?—シチエルバートフ『魂の不死に関する対話』と1770-80年代のプラトン受容」『SLAVISTIKA』第31号(東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室、2016年)、75-89頁

〔学会発表〕(計 4 件)

鳥山祐介 カラムジンの詩『ヴォルガ』

(1793)の中の「母」の形象、日本18世紀ロシア研究会(於:明治大学)、2017年9月23日

鳥山祐介 «Возвышенное» в произведениях Державина (デルジャーヴィンの作品における「崇高」) Державин в истории русской литературы (ロシア文学史の中のデルジャーヴィン)(於:モスクワ・モスクワ大学文学研究科ロシア文学研究室) 2016年10月18日

鳥山祐介 Тема Волги у Н.М. Карамзина (カラムジンにおけるヴォルガのテーマ) Карамзин-писатель: К 250-летию со дня рождения (国際学会「作家カラムジン:生誕250周年に寄せて」)(於:サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所) 2016年10月7日

鳥山祐介 «Отечественная война» и «заграничная война»:«Письма русского офицера» Ф.Глинки и путевые записки во время наполеоновских войн («祖国戦争」と「国外戦争」:フョードル・グリンカ『ロシア人将校の手紙』と対ナポレオン戦争期の旅行記) ICCEES IX World Congress 2015 in Makuhari (第9回国際東欧・中欧研究協議会幕張世界大会、於:神田外国語大学) 2015年8月4日

[図書](計 1 件)

金沢美知子編『18世紀ロシア文学の諸相:ロシアと西欧 伝統と革新』水声社 2016年(分担執筆)

担当箇所:鳥山祐介「ロモノソフと修辞学的崇高—十八世紀ロシアにおける「精神の高揚」の様式化」(51-80頁)

[その他]

ホームページ等

<https://researchmap.jp/read0123339/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

鳥山祐介(TORIYAMA YUSUKE)

千葉大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号:40466694